

「テープ通信」が言語学習に及ぼす効果と問題点

—アンケート調査からその可能性を探る—

板井 美佐

要 旨

香港城市大学商業及び管理学系、国際貿易専攻の学生は副専攻としてビジネス日本語を学んでいる。このコースではビジネス分野、特に日系企業で活躍できるような日本語運用能力を持った人材の育成を目指している。しかし、コースの時間数等を含む学習者を取りまく言語環境は質的にも量的にも十分とは言えない。そこで、この学習環境を改善するために上田が、「テープ通信」をクラス活動に採り入れた結果、「テープ通信」によって教師と学習者とのインターアクションの機会が高まり、言語運用能力の向上にも効果が現れたことを報告した。

筆者は上田の後を受け、「テープ通信」を続けて実施し、その経過を観察しながら、「テープ通信」に関する有効性を検証し、改善すべき問題点を明らかにする目的でアンケートを実施した。その結果、「テープ通信」は、言語運用能力を向上させ、学習者の話すことへの不安を取り除き、学習継続の動機と意欲を高め、さらには教師との相互理解を通して自文化及び日本文化に対する視野を拡大する効果があることが分かった。また、日本語習得が低い段階にある学習者には教師の何らかの介入が必要なことも明らかになった。

【キーワード】 テープ通信 言語運用能力向上 動機と意欲 視野の拡大
教師の介入

The Effectiveness and Problems of "Correspondence by Tape": searching for possibility from a survey

Itai, Misa

The City University of Hong Kong offers a business Japanese Language Program to students for the purpose of acquiring the proficiency of Japanese for business settings. However, the provisions for suitable language environment is not sufficient either in quality or in quantity. The previous attempt Ueda adopted "Correspondence by Tape" as a class activity with the aim of improving this situation, and reported on the interactions between a teacher and the students.

The author designed an version of improved Ueda's attempt and conducted a survey of its results. This survey showed that "Correspondence by Tape" improved students' proficiency, released their tensions, improved their motivations, and widened their viewpoints of both Chinese and Japanese cultures. Although this method is successful, the teacher should assist those whose Japanese proficiency still remains at a lower level.

1. はじめに

海外で日本語を教える際の最大の問題点は、学習者が生の日本語に接触し、かつ使ってみる機会が非常に限られているということである。彼らと目標言語との橋渡しをするのは唯一教師である場合が多い。このような限定された言語環境の中で発話の機会を作り、同時に学習継続の動機づけを高めるためにはどうすべきかということは、教師にとって常に大きな課題である。

近年言語教育の関心が教師から学習者へと移ってきたことを背景に、学習者が自分の学習を管理し、自ら機会を活用して学習を進めるという自律的学習が重要であるという考え方一つの流れになっている。教室活動の時間的、空間的限界を補うために、教室外の自律的学習に目を向けることは、特に海外において大きな意味がある。ここでの教師の役割は、自律的学習による学びかたを指導したり、方向づけたりすることである。学習者は自律的学習により教室活動で学習した知識を実際に使ってみる「場」を与えられ、その結果日本語・日本文化に深く結ばれる。

効果的な自律的学習プログラムの一つに「相互学習（外山1996）」がある。学習者は「相互学習」を通じて、発音・語彙・文法・社会的スキル等を自然な文脈の中で獲得すると同時に、自他文化への統合的理解をも深めていく。しかしながら、一般的に海外においてはパートナーが見つけにくいという実状がある。その場合に「相互学習」とはコミュニケーションの量も質も異なるが、導入の仕方によっては「相互学習」と同等の効果が期待できそうな自律的学習方法として筆者は「テープ通信（上田1995）」⁽¹⁾に注目した。上田は香港の学習者が「一人語り」に弱く、「単語一單文一段落一談話」へと発展するべき口頭言語運用能力が開発されていないとし、「テープ通信」を学習者の談話能力を養うための道具として位置づけ、3年間にわたり、のべ約150人の学習者を対象にこの「テープ通信」を行い、その結果、「テープ通信」が談話能力を向上させる可能性があることを示した。

筆者は「テープ通信」を「相互学習」のいわばミニチュア版として捉え、1997年に香港城市大学の学生を対象に行った。本稿では「テープ通信」をカリキュラムの中の一環として導入する前段階として、「テープ通信」の有効性及び問題点について、アンケート調査をもとに分析・考察するとともに、その改善方法と実際に導入する場合の効果的な枠組みを提案する。

2. 「テープ通信」導入の背景

2.1 コースと「テープ通信」のねらい

対象は香港城市大学商業及び管理学系、国際貿易専攻の3年生で、卒業年度の3年生までの間に日本語は副専攻として約360時間学習することになっている。コース設定の最終到達目標として「ビジネス・コンテキスト上で使えるような日本語の習得」ということが掲げられているが、週わずか3時間（3学年）の学習時間の中で教師が最大限できることは、学習者の基礎力の養成とその定着に力を注ぐことである。従って教室での授業は、各課の単語や文型の導入、会話文の解説と聞き取り、及び生教材の読解等が中心の教師主導型である。スピーチや課題の発表などによる主体的言

語活動を学期中にそれぞれ2、3回行ったとしても、全体から見てコミュニケーション能力育成に直接的に役立つであろう活動は不足している。また、1クラス20名前後であるため、学習者一人一人が教室内で口頭練習あるいは発言する機会は必然的に少なく、教師が各学習者の特性を考慮しながらすべてに目配りする時間もその割合も多いとは言えない。つまり、クラスは言語学的情報源としては機能しているが、言語習得に直接影響を及ぼすような環境を十分には与えられていないのである。その結果、学習者の口頭表現能力は高くないレベルに留まっている。

そこで、筆者は教室外の環境に目を向け、その環境の中で言語習得を促すような活動を学習者に与えようと考えた。では、言語習得を促すような環境とはどのようなものだろうか。クラシックは習得が効果的に起こる環境について多くのデータを提供しているが、「集中的で攝取型でインフォーマルな環境は、言語習得装置が機能する上で必要なインプットを与える」と述べている。また、学習者の情意面での働きが第二言語学習に影響を及ぼすことに着目し、学習を効果的にするためには学習者の情意フィルターを低くする必要があることを指摘している。筆者は以上の点を視野に入れながら、学習機会を増やし、学習したことを実際に使わせることで、実質的な言語スキルを学習者に獲得させるための自律的学習プログラムとして「テープ通信」を位置づけ、1学期間を通して行ってみた。

ここで、「テープ通信」の実施方法について述べる前に、この活動から具体的に何が期待できるかについて考えてみたい。

- ①学習者の情意面、能力面の個人差に対応できる
- ②母語話者との1対1の会話の機会を与える
- ③授業で習ったことを表現する機会を与える
- ④自由度の高い枠組みの中で自己表現する場を与える
- ⑤話すことに慣れることで、話すことへの不安を取り除き、日本語能力に対する自信を養成する
- ⑥パートナーとの相互理解を深めることで、自文化及び日本文化に対する視野を拡大する
- ⑦学習継続の動機と意欲を高める
- ⑧自己表現及びコミュニケーションそのものへの内発的動機付けを高める

2.2 「テープ通信」の方法

具体的な実施方法は、基本的には上田（1995）に従いながらも、若干それに手を加え、コースの初めに学習者に「テープ通信」を行うにあたって必要と思われるガイドラインを英語に翻訳して与えた。そのガイドラインは以下の通りである。

1. 課題は全部で4つで、「新年について」「将来の夢」そして2つの自由課題である。初めの2つの課題については録音提出後、同じテーマでスピーチを行う。基本的には課題は4つであるが、本人の興味次第でこれ以上提出してもかまわない。
2. 録音の前に、原稿は書かないで、言うことを簡単なメモに採る。

3. 録音の際は、メモを参考に話し、原稿やメモを読んではいけない。
4. 録音時間は3～5分である。
5. 録音の途中で間違いに気づいてもそのまま続ける。間違いを気にしない。
6. 教師からテープを返却されたら、それをよく聞き、前の録音を消去せずに、次の録音をする。
次の録音をする際、録音された教師の質問に答えた後で、課題を録音する。
7. テープ提出のベースは学習者の自主性に委ねる。

課題については、上田（1995）と同様に身近な話題を選択した。課題の半分を自由課題としたのは、自分の語学学習を振り返ると、むしろまず自分が話したいことを話す場が与えられれば、どうしても言いたいという欲求に支えられて、適切な表現を探す努力をするし、トピックを自分自信が選択することから、学習者はより深く課題に動機付けられ、その結果、積極的に課題に取り組む可能性が広がるからである。

次に、原稿を書かずにメモを取る程度で録音するよう指示したのは、学習者が評価を意識するあまり、誤りを回避しようとして、原稿を書いたり、それを読んだりして、自由に自己表現する機会を自ら奪ってしまわないようにと考えたことによる。また、正確な言葉の運用と自由な自己表現を同時に求めることは、このレベルの学習者には難しいと思われたので、ここでの指導目標の中心は、自由に自己表現するという点に置いた。そして、学習者がモニター使用によってスムーズなコミュニケーションプロセスを自ら阻害しないように、録音の際の間違いを気にしないようにという指示を与えた。

2.3 「テープ通信」指導の流れ

教師からの「テープ通信」指導の流れは以下の通りである。

- | | | | |
|-----------|-------------|------------|-----|
| ①テープを聞く | ②誤用チェック | ④誤用アドバイス | ⑧返事 |
| ③教師用カルテ記入 | ⑤意味不明部分への質問 | ⑥内容についての質問 | |
| | ⑦録音に対する感想 | | |

教師はまず学習者のテープを聞き、発音、語彙、文法、内容、話の流れ等をチェックし、それぞれの誤用と正用、疑問点、コメント等を学習者用通信用紙に記入する。これは後でテープといっしょに返却するためのものである。そして、同じものを教師用カルテに記入し、学習者の弱点及び進歩の程度をはかり、適宜授業でフィードバックを与えるための参考データとして保管する。次に、フィードバックとしての録音の中では、学習者の誤用の中でも特に目立ったもの、発音が不明瞭で意味が通らなかつたりしたものについてだけ指摘する。ここで誤りをできるだけ訂正しないやり方

を探ったのは、学習者が言葉の正確さを要求されると、誤りを回避しようとして自由な自己表現が阻害される懸念があるからである。続いて、内容についても幾つか質問して、次回それに答えるように指示を出す。教師が内容について質問する理由は、一つ目は学習者と教師の間に時間的にギャップはあるものの、コミュニケーションが成立していることを認識させるためであり、2つ目は学習者に質問を発することで、学習者が課題の内容へと向かい、そして質問に答える過程で用いた表現形式が習得されることをねらったためである。録音に対する感想は、前回提出の課題と比較して、今回はどの程度の進歩があったか、全体的に見てどんな印象を受けたか等について述べたものである。ここまで費やす時間は10分程度である。

最後に、学習者の録音内容に対しての返事を録音する。話す速度は日頃の授業における観察を判断材料に、学習者の聞き取り能力の限界に配慮して、不自然にならない程度でゆっくり話すことを中心とした。これは「言語習得は伝えられたメッセージが理解された時のみ起こる（クラシェン1981）」し、「自然なインプットは初心者⁽²⁾には複雑すぎ、習得のために利用することは難しい（クラシェン1981）」からである。筆者は指導の流れの中でも教師側の語りかけの部分は2つの効果が期待できると考え重きを置いた。まず、学習者を聞く作業に集中させることで聞き取りの能力が図れる。クラシェン（1981）は「聞くことに焦点を当てることで流暢さも獲得される」としている。加えて、教師が話す自然な文脈の中で語彙の使い方を学び、語彙量を増やすことができる。この点についてもクラシェンは「多くの語彙はより多くの理解をもたらし、より多くの習得をもたらす」と述べている。以上の点を踏まえながら学習者からの教師への質問に対する答えを軸に、学習者に聞かせる目的である程度まとまった内容を話すことを心がけた。ここで費やす時間は5分程度である。つまり1人の学生に1回の「テープ通信」につき約15分位で、4回で1時間程度の指導時間を要した。

3. 研究方法

上田は「テープ通信」によって「言語運用能力の面から『談話の型』で発展が見られた」とその有効性について報告している。しかしながら、そこでは1. 「テープ通信」に適した学習者の習得のレベル、2. 「テープ通信」に対する学習者の情意面での反応、3. 学習者からの評価⁽³⁾についての検討が行われていない。

言語的知識を持っていても習得段階に達していない学習者をクラシェン（1983）はモニター過剰使用者と呼び、その特徴は伝達能力を欠いていることだとした。そして、伝達能力を伸ばすには、学習者の不安や緊張を代表とする情意面での抵抗を少なくする必要があると述べている。筆者は習得が低い段階にある学習者と習得が高い段階にある学習者とでは、モニター使用の程度及び情意面での反応に差があり、これが「テープ通信」使用後の成果の差となって現れるのではないか、つまり「テープ通信」に適した習得レベルがあるのではないかと考え、2つの仮説を立てた。

1. 「テープ通信」は高い習得段階⁽⁴⁾にある学習者に効果的に機能し、言語能力特に口頭表現能力を高めるだろう。

2. 「テープ通信」は低い習得段階にある学習者には効果的には働きかず、口頭表現能力の成果があまり見られないまま終わってしまう。

この仮説を検証し、かつ今後「テープ通信」を本格的にカリキュラムの中に組み入れるにあたって、改善すべき要因を洗い出す必要性から、アンケートを行う。その具体的な項目は以下の通りである。

1. 「テープ通信」のねらい 8 項目に焦点を当て、その有効性を明らかにする。
2. 「テープ通信」の改善すべき点を明らかにする。
3. 「テープ通信」が学習者にどのような変容をもたらしたかを明らかにする
4. 「テープ通信」は学習者の習得レベルの差に対応できたかどうかを明らかにする
5. 学習者の「テープ通信」の活用方法を明らかにする。

4. アンケートの実施方法

前節では「テープ通信」の研究方法について述べたが、ここでは、調査の結果をもとに、「テープ通信」の検討すべき課題についてデータをもとに分析・考察していく。筆者は1997年4月、同大学同学系同専攻の3年生35名（2クラス）を対象に英語で調査を行った。調査方法は、4段階評定の選択方式と自由記述方式を併用し、94%回収した。アンケートは上田（1996年前期=14週間）と筆者（1997年後期=14週間）が行った「テープ通信」1学期間（1年間）に対しての結果である。

内容は、1. 全体的評価を問う項目（表1）、2. 「テープ通信」の有効性の認知を問う項目（表2、表6）、3. 「テープ通信」の問題点を問う項目（表3、表4a、4b、表5a、5b）、4. 「テープ通信」回数を問う項目（表7）、5. トピックの与え方を問う項目（表8）、6. 「テープ通信」に伴う不安感を問う項目（表9a、9b、9c）、7. 「テープ通信」の利用の仕方を問う項目（表10）、8. フィードバックの情報性の認知を問う項目（表11）、9. 「テープ通信」に対する学習者からのアドバイスを問う項目（表12）である。尚、自由記入方式の回答については日本語でも英語でも広東語でも良いことにした。

5. 結果と考察

全体的な評価の結果は、表1のようになった。

表1. 全体的評価（複数回答）

面白かった	退屈だった	大変だった	難しかった	役立った	役立たない	その他
22人	1人	5人	9人	30人	0人	0人

表1の全体的評価では、「面白かった」「役に立った」という肯定的意見が多く見られた。このおもしろかったという意見は、「教師の最後の語りの部分が面白かった」、「日本についていろいろなことが理解できてよかったです」というコメントから伺われる。

自由記述では「大変だった（4人）」という否定的コメントが見られた。

5.1 おもしろかった点、退屈だった点

表2. 「テープ通信」はどこが面白かったか

	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
発音矯正に役だった	33.3%	63.7%	3.0%	0.0%
日本語を聞く機会が増えた	33.3%	51.5%	15.2%	0.0%
日本語を話す機会が増えた	45.5%	54.5%	0.0%	0.0%
身近なトピックが話せた	33.3%	48.5%	18.2%	0.0%
興味のあるトピックが話せた	30.3%	54.5%	12.2%	3.0%
トピックが面白かった	3.0%	75.8%	21.2%	0.0%
日本語を話すのに慣れた	15.3%	42.4%	39.3%	3.0%

表2によると、面白いと感じた主な理由は、「日本語を話したり聞いたりする機会が増えた」からであり、「発音矯正に役だった」からである。トピックについては、身近で興味のあるトピックについて話せたと肯定的な評価を下しながらも、面白くなかったという意見も20%以上あることから、トピックの内容は検討する余地がありそうである。ただし、このトピックははたして課題のトピックなのか、教師がテープに録音した語りの部分の内容についてなのかなは判別できない。

「テープ通信」のねらいの一つである「話すことに慣れる」については、肯定的な数値が出たとは言えない。やはりたった8回だけの実施では、筆者が期待するような効果ははっきりとは現れにくいのかもしれない。

自由記述によれば、「教師のフィードバックの内容を聞くのは大変いい練習になったが、話すことに関して言えば、日本語の上達に『テープ通信』が役立ったとは言えない」という意見と「役立つが、時間が取られるのが難点だ」という問題が述べられていた。

表3. 「テープ通信」のどこが退屈だったか

	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
日本語を話すこと興味がない	4.2%	4.2%	62.5%	29.1%
トピックが面白くない	0.0%	33.3%	54.2%	12.5%
教師が返事の時、何を言っているのか	0.0%	40.9%	45.5%	13.6%
分からなかった				

表3によると、日本語を話すこと興味がないわけではないが、ほぼ3割の学生がトピックが面白くなかったことを指摘し、4割の学生が、教師が話すスピードに配慮したにもかかわらず、「教

師の質問や語りかけが聞き取れなかった」から退屈だったと答えている。これはテープは何回も巻き戻して聞けることから考えても、学習者の聞き取り能力が教師の予想をかなり下回っていることを示唆している。聞き取れなければ面白くないのは当然で、こうなると学習者の意欲を高めるどころか返って学習者の自信を喪失させ、ひいては学習継続の動機付けを著しく損なうというマイナス効果をもたらしかねない。言語習得の面から見れば、与えられたメッセージが理解されなければ習得も起こらないので、ティーチャーズトークは習得程度の低い学習者には必要であると思われる。「テープ通信」を導入する際には、学習者の習得程度の個人差にどう対処するかが今後の課題であろう。

5.2 大変だった点、難しかった点

表4 a. 「テープ通信」のどこが大変だったか

	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
録音の時たくさん準備	6.1%	45.4%	42.4%	6.1%
正確な日本語を話す自信がない	18.2%	30.3%	51.5%	0.0%
元々話すことが上手ではない	16.7%	41.7%	33.3%	8.3%
課題なので仕方なくやった	3.0%	36.4%	51.5%	9.1%
パートナーが教師だった	0.0%	8.7%	60.9%	30.4%
専門で忙しかった	4.2%	54.2%	33.3%	8.3%

表4 b. 習得別

成績上位 (A or B)				成績下位 (C or D)				
強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成	
たくさん準備	0.0%	6.7%	80.0%	13.3%	11.1%	77.8%	11.1%	0.0%
自信がない	0.0%	13.3%	86.7%	0.0%	33.3%	44.4%	22.3%	0.0%
仕方なく	0.0%	6.7%	80.0%	13.3%	5.6%	61.1%	27.7%	5.6%

表4 aは、「テープ通信」を導入する際考えなければならないポイントをよく示している。筆者は当初大変であることの最大の理由は、専門の勉強が忙しいからだろうと予想していたが、事実は「課題なので…」が4割弱、話すことそのものに対する自信のなさを示す数値が5割近くに上っていた。また、「録音する時たくさん準備しなければならなかった」が5割強もあることから、教師の期待に反して、多くの学習者が原稿を準備してそれを読むか、あるいは見ながら話していたことが推察できる。

このうち3項目を取りだして習得別（表4 b参照）に比較すると、日本語習得レベルの高い学習者と低い学習者の差がはっきりする。すなわち、習得レベルの高い学習者は日本語を話すことに自

信を持っており、録音の準備にあまり時間をかけていない。一方、習得レベルの低い学習者は自信がなく、録音の準備に時間をかけている。この違いは、両者の課題の取り組み方の違いにも現れていて、習得レベルが低い学習者は6割以上が「課題だから仕方なくやった」と答えているのに対し、習得レベルが高い学習者は8割がそうではないと答えている。

倉地（1992）は、ジャーナルアプローチの展開の中で、自由な自己表現により文章表現能力の習得に一定の効果があったと報告しているが、口頭表現能力の向上をめざす「テープ通信」を同じコンセプトで捉え、そこから同様の成果を期待するのはやや無理があると思われる。学習者の実際のレベルと到達目標をつき合わせて著しいズレが発見できた場合は、課題をより現実的なものに設定しなおす必要があるだろう。つまり、ここでは自由に表現できない学習者には課題構成上必要と思われるフォーマットを渡して、それを参考に録音をさせてもいいのではないかと考える。

表5a. 「テープ通信」のどこが難しかったか

	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
原稿なしに録音する	13.8%	44.8%	31.0%	10.3%
録音の時、緊張する	14.3%	46.4%	32.2%	7.1%
正確な発音で話すことに自信がない	21.4%	60.7%	14.3%	3.6%
正確な文法で話すことに自信がない	32.1%	46.4%	17.9%	3.6%
レベルが低いので自分の考えていること をうまく表現できない	3.0%	51.5%	36.4%	9.1%
教師が言っていることが理解できなかった	3.0%	39.4%	51.5%	6.1%
教師の話すスピードが早すぎた	3.0%	24.3%	60.6%	9.1%

表5b. 習得別

	成績上位 (A or B)				成績下位 (C or D)			
	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
たくさん準備	0.0%	6.7%	80.0%	13.3%	11.1%	77.8%	11.1%	0.0%
表現できない	0.0%	33.4%	46.6%	20.0%	5.6%	66.6%	27.8%	0.0%
理解できない	0.0%	20.0%	73.3%	6.7%	5.6%	55.5%	33.3%	5.6%
早すぎた	0.0%	20.0%	66.7%	13.3%	5.6%	33.3%	55.5%	5.6%

まず、ラジカセに録音する際の学習者の緊張度を見てみよう。表5によれば、なぜ緊張するかと言えば、「正確な発音で話す自信がない」と「正確な文法で話す自信がない」からである。学習者の習得を促進させるには、これら心配や緊張の情意レベルを低くしてやる必要があるだろう。

フィードバックの与え方の項目を見ると、学習者が難しいと感じる原因は、教師のフィードバック

クの与え方に問題があるのでなく、むしろ学習者の習得が「テープ通信」を効果的に使いこなす適切な段階に到達していないからである。習得別（3項目のみ選択）の表5よりによれば、習得程度が低い学習者はおそらく「日本語を話す自信がない→課題だから仕方ない→リスクを回避したい→原稿を書く→原稿を読む→フィードバックの内容も聞き取れない」という状態にあり、せっかく自由な自己表現をする場が与えられながら、それを活用しえずに終わってしまっているようである。つまり、ここで冒頭の「テープ通信」は習得が高い段階にある学習者には効果的に機能するが、習得が低い段階にある学習者には効果的には働かないという仮説の正しさが確認されたと言える。ある程度流暢に話せる段階に到達している学習者は別として、発音面でも文法面でも学力不足である学習者には、課題をクリアするための何らかの方策を与えてやらなければ、いたずらにストレスを与えることになってしまうと思われる。

5.3 変わった点

表6. 「テープ通信」をやって何が変わったと思うか

	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
聞き取り能力が向上した	12.5%	68.7%	18.8%	0.0%
発音が良くなった	12.5%	65.6%	21.9%	21.9%
語彙が増えた	18.8%	65.6%	15.6%	15.6%
文法の間違いに気がついた	24.3%	72.7%	3.0%	0.0%
より自然な日本語が身に付いた	15.6%	46.9%	37.5%	0.0%
日本語を話すことに自信が付いた	6.3%	40.6%	53.1%	0.0%
日本語を話すことが面白くなった	9.1%	81.8%	9.1%	0.0%
言いたいことが言えるようになった	21.2%	36.4%	39.4%	3.0%
日本語がだんだん流暢に話せるようになった	3.1%	37.5%	53.2%	0.0%
日本語や日本人の物の考え方興味を持つようになった	13.3%	63.3%	23.4%	0.0%
日本についての知識を深めることができた	12.5%	56.3%	31.3%	0.0%

表6によると、聞き取り、発音、語彙、文法面で効果があり、その結果、情意面でも日本語を話すことが面白くなる等の変化が現れたことが分かる。異文化理解・学習の領域でも一定の成果が見られ、学習者の多くが日本語や日本人の物の考え方興味を持ったり、知識を深めることができたと答えている。但し、データから依然として5割以上の学習者が話すことに自信がなく、しかも言いたいことが言えないという状態に留まっていることが分かる。ここで話すことに自信がついた46.9%の学習者と言いたいことが言えるようになった57.6%の学習者に注目して、「テープ通信」は効果があったとするか、あるいはあまり進歩が見られなかったとする学習者を見て検討の余地が

あるとするかは、判断が難しいところであろう。

5.4 適当な回数

表7. 「テープ通信」は1学期の間に何回するのが適当か

1回	2回	3回	4回	5回
0.0%	21.2%	72.8%	3.0%	3.0%

学習者に課した録音時間と原稿なしに話すという前提だから考えると、「テープ通信」をする上での学習者の負担は決して多いとは言えないが、今まで見てきたように、多くの学習者が話すことへの不安を取り除くために、原稿を書いてそれを読んでいることを考えると、準備と録音そのものに費やす時間とエネルギーは相当なものだと考えられる。このことから、教師は少なくとも4回以上実施したいと考えていたが、学習者の94%が3回以下を適当と答えたことは当然のように思える。つまり、専門の学習に迫られている学習者にとっては、このあたりの回数が適当と言うことだろう。

5.5 トピックの与え方

表8. トピックは与えられたほうがいいか、自分が自由に選択したほうがいいか

教師から	自分から
27.6%	72.4%

表8によると、圧倒的に学習者は自由な選択を望んでいることが分かる。特に自由記入のデータによると、授業中積極的に授業参加をするアウトプットの多いタイプの学生はほとんど全員が「自由に選択できるほうが楽しいし、意欲もわく」と答えていた。

5.6 不安感について

表9 a. 録音する時の気分

	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
録音する時、緊張した	21.2%	39.4%	33.3%	6.1%
課題を続けていくうちにリラックス	12.1%	72.7%	12.1%	3.1%

表9 b. 習得別

成績上位 (A or B)					成績下位 (C or D)			
たくさん準備	0.0%	6.7%	80.0%	13.3%	11.1%	77.8%	11.1%	0.0%
表現できない	0.0%	33.4%	46.6%	20.0%	5.6%	66.6%	27.8%	0.0%
理解できない	0.0%	20.0%	73.3%	6.7%	5.6%	55.5%	33.3%	5.6%
早すぎた	0.0%	20.0%	66.7%	13.3%	5.6%	33.3%	55.5%	5.6%
成績上位 (A or B)					成績下位 (C or D)			
緊張した (録音時)	7人 (46.7%)				13人 (72.2%)			
緊張しなかった (録音時)	8人 (53.3%)				5人 (27.8%)			
リラックスしなかった (終了後)	2人 (13.3%)				3人 (16.7%)			
リラックスした (終了後)	13人 (86.7%)				15人 (83.3%)			

表9 c. 習得別

成績上位 (A or B)		成績下位 (C or D)	
録音した時ドラフトを読んだ	8人 (53.3%)	18人 (100.0%)	
メモを参考に自由に話した	7人 (46.7%)	0人 (0.0%)	

学習者が「テープ通信」を録音する際の情意フィルターのレベルを知るため、習得程度が高い段階にある学習者と低い段階にある学習者に分けて、録音時と録音練習終了後の状態を比較してみた結果が表9 bである。結果は習得の高い低いにかかわらず、緊張状態にあったことを示していた。これは、我々が音声で情報のやり取りをする場合に特に緊張や不安を感じる傾向にあるからで、しかも通常のコミュニケーションの過程では、話し手のメッセージが聞き手に理解され、聞き手からのフィードバックを直接・間接的に受けることで完結するが、「テープ通信」では教師から学習者へのフィードバックは時間的にタイムラグがある。このため学習者を不安な状態に置くことになるのである。Clementら (1985) は、学習者が持つ不安が第二言語使用時のコミュニケーションを規定しており、目標言語を使用することにより不安感が減少し、コミュニケーション能力が高まるとし、目標言語使用の重要性を指摘している。この表の結果は、「テープ通信」を続けていくことで不安感が消えて、話すという言語活動を受け入れやすい態勢に移行したことを見ている。

次に、録音の際、指示通りに学習者が、メモを参考に自由に自己表現をしたかどうかを見てみた。(表9 c 参照) 結果は、日本語能力の高い7人を除いて全員が、ドラフトを読んでいたことが明らかになった。習得レベルが低い学習者は、上手に話せないという不安感からか、100.0%が原稿を書いてそれをただ読んでいただけだったようだ。これら口頭表現能力が不十分である学習者に「テープ通信」を実施する場合には、教師が何らかのアドバイスや表現方法の示唆を与えるなどの介入が必要である。

5.7 利用方法

表10. 「テープ通信」の使い方

	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
教師のアドバイスの後で、自分の録音をもう一度聞いた。	24.2%	51.6%	24.2%	0.0%
教師のアドバイスとメッセージを聞いた	18.8%	46.9%	21.8%	12.5%
教師の話し方をまねした	40.6%	43.8%	12.5%	3.1%
注意された発音と文法の誤用をチェックし次の録音の時気をつけるようにした	40.6%	59.4%	0.0%	0.0%
教師が使っていた語彙を辞書で調べ会話の中で使うようにした	25.0%	59.4%	15.6%	0.0%

表10から、学習者は教師からのフィードバックをいろいろな角度から活用していることが分かる。特に誤用に関しての反応は高く、注意を受けた誤用に関しては、同じ誤用を繰りかえさないように気をつけていることが分かる。また録音の中で教師が使っていた語彙を辞書で調べた学習者、教師の話し方をまねた学習者の比率は84.4%だったことから、テープの中で教師が個々の学習者に与えるインプットは学習上かなり意味があることを示している。

5.8 フィードバック

表11. 「テープ通信」のフィードバック

	強く賛成	賛成	不賛成	強く不賛成
フィードバックは役に立つ	44.8%	55.2%	0.0%	0.0%
発音のフィードバックは役に立った	62.5%	37.5%	0.0%	0.0%
文法や表現のフィードバックは役に立った	59.4%	40.6%	0.0%	0.0%
教師は発音や表現をもう少し丁寧にチェックすべきだ	37.5%	46.9%	15.6%	0.0%
フィードバックの内容は面白い	25.8%	64.5%	9.7%	0.0%
内容のフィードバックが十分でない	3.2%	37.5%	53.0%	6.3%
フィードバックで話すことに自信がついた	9.6%	54.9%	35.5%	0.0%
フィードバックで徐々に流暢に話せるようになった	6.5%	35.5%	54.8%	3.2%
テープの録音ごとに評価を与えるべきだ	12.5%	75.0%	9.4%	3.1%

表11によると、教師からのフィードバックを100.0%の学習者が役に立ったとしている。具体的

には発音、文法、表現などであるが、内容についても面白かったとする割合が高かったことから、単に学習者の誤用を指摘し、内容について質問をするだけでなく、相互的コミュニケーションが成立していることを前提に、教師側からもあるまとまった語りをインプットすることは意味があると思われる。小池ら（1994）も「話す技術は聞く技術とともに学ばれる」としている。

次にフィードバックが話す能力の向上にどの程度役に立ったかであるが、直接的な効果を示す数値は高いとは言えないが、約半数以上の学習者が「話すことに自信がついた」と答えている。また、「発音や表現についての教師からのチェックをもっと丁寧にしてほしい」という意見が84.4%にも上った。これは学習者が、教師が必要だと感じる以上に誤用訂正のフィードバックを望んでいることを示している。

注目すべきデータは、学習者がテープの内容に関しての評価を望んでいたことで、これについては毎回何らかの形式・内容についてのコメントをしたつもりだったが、学習者は何をどうしたら良くなるかという具体的なアドバイスと同時に数値的評価を望んでいたようだ。Deci&Ryan（1985）によれば、フィードバックが具体的な情報を提供するものであれば、学習者の不安を低め、学習者にプラスに機能するという。自由な自己表現の場を与えるという「テープ通信」の目的を損なわない限りにおいて、評価・アドバイスの与え方を考える必要がある。

自由記述によると、「時々教師の話すスピードが早すぎて言っていることが分からなかった」というものがあった。一般に学習者は、自らの認知能力では内容理解が困難であると判断した場合、学習への動機付けが下がり、学習効果も低下することが分かっている。従って、学習者の認知能力に照らして適切と判断されるようなスピードと内容を、教師は自分の経験則から判断して選択する必要があるだろう。

5.9 学習者からのアドバイス

表12. 「テープ通信」に対するアドバイス（複数回答）

【発音についてのコメント】

△自分達が書いた原稿をチェックしてもらってから、教師にそれを読んでもらったら、発音やイントネーションを学べるし、まねができるいいと思う（4人）

△教師から直された発音やイントネーションは、再度録音して正確なものになっているかどうかチェックしてもらいたかった（1人）

△日本語の正しいトーン、アクセント、ポーズについてのアドバイスが役に立った（2人）

△もし教師が私たちの発音をもっと直してくれたらもっと良かった（2人）

【語彙、文法についてのコメント】

△録音する内容を原稿に書いて教師に誤用を直してもらってから録音したらもっといい（1人）

△知っている語彙が少なすぎて自由には話せないと思う（1人）

【トピックについてのコメント】

- △楽しいトピックを与えてもらったら話しやすい（1人）
- △トピックは身近なもののがいい（2人）
- △もっといろいろな話題について教師と意見交換したかった（1人）
- △とても楽しかった。特にトピックを自由に選べたので、自分が話してみたいと思っていたことが表現できだし、日本語も上手になった（2人）
- △トピックは日本の雑誌などから選ぶといいかもしれない（1人）
- △「テープ通信」は学生が日本文化や日常生活について理解するのに役に立つ（1人）

【やり方についてのコメント】

- △今のやり方でいいと思うし、とても楽しかった（1人）
- △評価が気にならなかったし、話すことに自信がなかったので、原稿を準備した（1人）
- △一年生の時から初めていたらもっとよかったです（1人）
- △録音前に練習をしたほうがいい。練習もなしにいきなり録音をしろと言われても困る（1人）
- △話す機会が少ないので、もっと回数を増やしたほうがいい（2人）
- △もっとたくさんのコメントと意見がほしかった（1人）

ここでは、33人の回答の内、典型的なものを列挙したが、中でも発音、アクセント、イントネーションに関するより丁寧な指導を望む声が高かったと思う。またある正確さを追求するタイプの学習者は自由に話すのではなく、正確に話すこと目標に、原稿を書いてそれを読むほうが役に立つとしている。しかし、これは多くの時間を要し、あまりに教師の負担が大きいことが問題である。

語彙・文法に関してのコメントでは、実力不足がネックになったとしているものが見られたが、これは筆者の仮説通りで、「テープ通信」導入にあたっては、個々の学習者の習得程度の差を見ながら、特に能力不足の学習者にどう個別に指導していくかがポイントとなるだろう。

トピックについては、学習者が自由に選択できたほうが、言いたいことを表現できると言う意見が見られた。これはやはり表8の結果と符合している。母語で言いたいことを外国語で表現しするというのは、語学学習の究極の目標である。話したいことを話せる環境が与えられれば、学習者はその意欲に支えられて語彙や表現を自分で探し、結果として多くを学ぶことになるだろう。学習上の効果を考えると、トピックは身近な所から初めて抽象的なレベルに持っていくのが一般的だが、学習者のレベルを視野に置き、この段階の学習者に自立的に課題によって語彙及び表現を学ばせ、同時に自由に話す機会を与えるつもりなら、トピックは身近で具体的なものにすべきである。しかしながら一方では、学習者を個別に指導できるという「テープ通信」の特徴を生かして、習得レベルが高い学習者にはやや高めの課題として抽象的トピックを与える可能性もあるだろう。

やり方についてのコメントは、概ね肯定的なものが見られたが、最も示唆に富むものは、1年生の時から始めたらもっとよかったですという意見である。まだ語彙も文法項目もあまり学んでいない1

年生にこのシステムを導入するなら、ある枠組みを提示するとか、教師の工夫が必要だと思うが、教師以外には日本語母語話者がいない環境において話す機会を作り与えるには、やはり「テープ通信」が一つの効果的なアプローチとなることは間違いない。最後に、「テープ通信」を効果的にするために必要な作業の一つに、録音前のガイダンスの与え方の工夫がある。学生のコメントにも録音前の練習に関して述べているものがあったが、ガイダンスの中で「『テープ通信』をやった後で日本語で何ができるようになるか」を明確に示せば、学習者もそれに沿って適切なやり方を選択できたのではないかと考える。

6. むすび

「テープ通信」は相互的コミュニケーションを通して、日本語を聞いたり、話したりするための一つの道具である。その大きな特徴は、話すことへの不安を解消し、日本語学習継続の意欲を高め、動機付けを向上させることである。異文化の側面から見ると、教師との異文化接触により自他文化への理解を深めるという効果も期待できることから、使い方次第では総合的なコミュニケーション能力養成のための効果的なアプローチになりうる。しかしながら、学習者の日本語習得レベルによっては、期待通りの効果が現れない可能性がある。そこで、「テープ通信」が学習者の個別性に対応できるという特性を生かして、「テープ通信」に適合しにくい学習者には与え方を工夫するとか、学習者の習得レベルに合わせて段階的に導入するとか、効果的な指導方法を検討していく必要があるだろう。また、これは課外の活動であるため、学習者にとって負担が大きいとか、学習者が望むやり方で実施するなら教師側の負担が多大であるとかの時間的労力的問題が残っている。

最後に、「テープ通信」は学習者の自立的学習支援の道具としてカリキュラムの中でその有効性を十分に發揮させるためには、さらに多くの実践及び検討を加えていく必要がある。

注

- (1) 上田和子(1995)「言語教育における『対話』と自律学習」『日本語教育・日本研究論文集』21-36.
- (2) 筆者は学生の聞き取り能力は中級段階に達しているとは言えないと判断した。
- (3) 「テープ通信」は自律的学習の道具である。すなわち、学習者を主体として考えるべきで、この意味からすれば、「テープ通信」にとって学習者からの評価は重要であると考える。
- (4) ここでは5段階(A、B、C、D、F)評価の内、成績がAあるいはBである学習者を高い習得段階にある学習者とし、成績がCあるいはDである学習者を低い習得段階にある学習者とした。

参考文献

1. Clement, R. & Kruidenier, B. J. (1985) "Aptitude, attitude and motivation in second language proficiency: a test of Clement's model." *Journal of Language and Social Psychology*, 4, pp.21-37.

2. Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination*. New York : Plenum Press.
3. Krashen, S. (1981) *Second language Acquisition and Second Language Learning*. Oxford : Pergamon Press. PP.25-61.
4. Krashen, S. (1983) *The Natural Approach : Language Acquisition in the Classroom*. CA : Alemany Press.
5. 上田和子(1995)「『テープ通信』を用いた日本語コースの試みー香港でのビジネス・ジャバニアーズの場合」『世界の日本語教育』4：45-60.
6. 上田和子(1995)「言語教育における『対話』と自律学習」『日本語教育・日本研究論文集』21-36.
7. 倉地暁美(1994)「ジャーナル・アプローチの展開ー日本語・日本事情教育の新しい方向に向かってー」『日本語教育』82：123-133.
8. 倉八順子(1996)「スピーチ指導におけるフィードバックが情意面に及ぼす効果」『日本語教育』89：39-51.
9. 小池生夫(1994)「第二言語習得研究に基づく最新の英語研究」大修館書店

[資料1]

Tape correspondence : 1997

Questionnaire Survey

I am conducting a questionnaire survey to investigate the views on the tape correspondence to improve the quality of this activity. Could you please complete the attached questionnaire and return it to me? The information provided by you will be kept confidential and will be used only for research purposes. Thank you for your cooperation.

For multiple choice questions, please put a in the appropriate box. For other questions, please write down your answers in detail.

Sex: Male Female

Name: () Class: J1 J2

1. What do you think about the tape correspondence?

If necessary, you may circle more than one answer.

a. Interesting (I enjoyed it very much)

b. Boring

c. Hard

d. Difficult

e. Helpful, Useful

f. Not helpful

(reason:)

g. Others ()

2. Why do you enjoy this tape correspondence?

Strongly

Agree

Strongly

Agree

Strongly

Disagree

Strongly

Disagree

a. Helpful to correct the pronunciation

- b. Increases the opportunity to listen
- c. Increases the opportunity to speak
- d. Able to talk about familiar topics
- e. Able to talk about the topic I'm interested in.
- f. Topic is very fun/interesting
- g. I get used to talking Japanese.

3. Why do you feel this tape correspondence is boring?

- | | Strongly | | | |
|---|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| | Agree | Agree | Disagree | Strongly
Disagree |
| a. I'm not interested in talking in Japanese. | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| b. Topic was not interesting. | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| c. I couldn't understand what the teacher was talking about when she responded. | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |

4. Why do you feel this is so hard to do?

- | | Strongly | | | |
|--|--------------------------|--------------------------|--------------------------|--------------------------|
| | Agree | Agree | Disagree | Strongly
Disagree |
| a. Before recording, I had to make too much preparation. | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| b. I don't have confidence in speaking accurate Japanese. | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| c. Originally I was not good at talking. | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| d. Since it was an assignment, I felt forced to talk. | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |
| e. Partner was a teacher. (I wanted to talk with a partner who is not a teacher.) | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> | <input type="checkbox"/> |

f. I'm so busy with my major.

5. Where did you find the difficulty in this activity?

	Strongly		Strongly	
	Agree	Agree	Disagree	Disagree
a. Recording without a draft.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
b. When recording, I felt nervous.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
c. I don't have confidence in talking with accurate pronunciation.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
d. I don't have confidence with accurate grammar.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
e. I couldn't make myself understood because of a lack of proficiency.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
f. I couldn't catch on to what a teacher was saying.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
g. The speed at which the teacher was talking was very fast	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

6. Through this assignment, do you feel something has changed?

	Strongly		Strongly	
	Agree	Agree	Disagree	Disagree
a. I improved my listening ability.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
b. My pronunciation is getting better.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
c. I increased the number of vocabulary words.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
d. I realized mistakes in grammar.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
e. I acquired a more natural Japanese.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
f. I gained confidence in talking in Japanese.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

- g. I feel interesting in talking more Japanese.
- h. I could express what I wanted to say.
- i. I gradually could speak Japanese fluently.
- j. I became interested in Japanese and the way of Japanese thinking.
- k. I deepened my knowledge about Japan.

7. In reference to tape correspondence, how many times are the most suitable for each semester?

Once Two times Three times Four times More than five times

8. Do you prefer to be assigned a topic or rather do you prefer to talk freely?
Assigned Talk freely

Strongly Strongly

9. Agree Agree Disagree Disagree

a. When you record, do you feel nervous?

b. After you continue doing this activity do you find that you could relax?

c. When you record, did you read your draft you had written

d. Did you just write down a memo and talk freely?

10. Tell me about the usage of tape correspondence.

Strongly Strongly
 Agree Agree Disagree Disagree

a. After paying attention to the suggestions of the teacher, I listened to my recording again.

b. I just listened to the teacher's message and suggestions.

- c. I imitated the way the teacher was
 talking.
- d. I paid attention to the pronunciation
 and grammar suggested by the teacher, and tried to pay attention to these
 mistakes when recording the next time.
- e. I looked up the vocabulary the teacher
 was using in the dictionary. If I had a chance, I tried to use it in
 conversation.

11. Tell me about the feedback of tape correspondence.

	Strongly Agree	Agree	Disagree	Strongly Disagree
Feedback is helpful.	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>

- a. Feedback about pronunciation was helpful
- b. Feedback about grammar and expression
 was helpful.
- c. Teacher should check pronunciation and
 expression more carefully and respond in greater detail.
- d. The contents about feedback are
 interesting.
- e. Feedback about the contents was not
 enough.
- f. Because of the feedback, I gained
 confidence in talking.
- g. Because of the feedback, I gradually
 could speak Japanese fluently.
- h. Teacher should give us an evaluation
 for each tape recording
- i. Why wasn't the feedback helpful? (reason)

12. If you have a suggestion or advice about tape correspondence, please write
it down in detail.

Thank you very much ! !